

2012年7月12日

新潟地方裁判所 裁判官 様

緑川 敦子

意見陳述書

- 1 福島第一原発事故後、福島県いわき市から母子避難している緑川敦子（37歳）です。
現在、子ども2人をつれて、新潟市内の借り上げ住宅で避難生活しています。
長男は4歳、長女は3歳です。
夫は、仕事のため、いわき市で生活しています。
- 2 私は、いわき市で梨農園をいとなむ両親の間に生まれました。
自然がとても豊かなところです。
子どものころは、野生児のように、毎日、山や川で遊び自然と触れ合って育ちました。
夫と結婚して、2人の子どもができました。
子どもたちにも、自然と触れ合って育ててほしい、毎日泥んこになって帰ってくるような、元気な子どもになってほしいと思いました。
原発事故が起こるまでは、実家の田植えの手伝いに、子どもたちを連れていきました。
父母も、子どもたちが田んぼで遊んでいる姿を見て喜んでいました。
両親は有機野菜をつくっていました。
子どもたちは両親の作った野菜を喜んで食べていました。
両親のつくる梨は贈答品として販売していました。
私も友人に毎年贈っていました。友人からおいしいと喜んでもらっていました。
- 3 原発事故は、私たちの生活から「笑顔」を奪い取りました。
東京電力、原発に対して、言いたいことはたくさんあります。
何よりも言いたいことは、「もとの生活を返してほしい」ということです。
原発事故の後、食べ物のことから、日常生活のさまざまなことに、放射能がかかわっています。
どこまでも続く壁のように。きりはなして考えることができないのです。
私はいわき市です。いわき市では以前と同じように生活している方もいます。
「根こそぎ生活を奪われた」わけではないと言われるかもしれませんが。
でも、日常から本当の「笑顔」が奪い取られました。
笑顔はあるのです、でも心から笑顔になることができないのです。
- 4 空がどんなにきれいでも、放射性物質があると思うと、心から美しいと感じることができなくなりました。

花がきれいに咲いていても、心から美しいと思えなくなりました。

事故の前、子どもたちに、「きれいな花だね」「虫さんだよ」と言って、自然に触れ合うようにしてきました。

事故の後、子どもが公園に咲いていた花を見て、手で触ろうとしました。

とっさに、私は「さわっちゃだめ」と言って、子どもの手を押えてしまいました。

今、私は、子どもたちに、

「お外は危険なところ」

「土は触ってはいけないもの」

「花は見るもので、触れてはいけないもの」

「虫はきたないから、触れてはいけないもの」

と教えなければいけないのかと思うと、悔しさと怒りがおそってきます。

子どもたちには、福島の地で、目にうつる美しいものを「美しい」と言う、そういう人間としてふつうの経験をして成長してほしいと願っていたのに。

福島の地で、「お花がきれいだね。いい匂いがするね。」「楽しいね」「おいしいね」と笑いながら成長してほしいのに。

まだ幼い子どもたちに、放射能の危険性を少しずつ教えていかなければならないのです。

この春、長男がサッカー体験教室に参加しました。

長男は、とても楽しかったようで、「またサッカーをやりたい」と言いました。

私は「いいよ」と言おうとした瞬間、気づきました。

新潟にいる間に息子がサッカーを大好きになってしまって、福島に戻った後もサッカーを続けたいと言ったら、どうしようと思ったのです。

最初から外のスポーツはやらせないほうがいい、放射能のリスクのないスポーツを選ばせようと思いました。

事故から時間が経つにつれて、これも失った、あれも失ったと、失くしたものに気づきます。

5 私は子どもたちの健康を1番にして避難の道を選びました。

だからといって、避難していない人が子どもたちの健康を1番にしていなくていいわけではありません。

避難したくてもできない方々や子どもたちのことを考えるたびに、うしろめたさみたいな感情に、押しつぶされそうになります。

私たちのような「自主」避難者に対して、「逃げるらしいよ」「今も逃げているらしい

よ」「ふるさとを見捨てた」と言う人がいるとも聞いています。

今年の4月から、自主避難者の高速無料化がなくなりました。
自主避難者の多くは、母子避難で、父親は福島で働いています。
週末に会いに来てくれていた父親が来れなくなったという話を聞きます。
一般道を6時間かけて福島から来られる父親もいるようです。
放射能のせいで、家族、友人関係、地域社会が、ズタズタに引き裂かれました。
たくさんの事を犠牲にしています。

6 事故から1年4か月が過ぎました。

怒涛の生活の中で、必死に生きてきたように思います。
あまりにもたくさんの事がありますので、いまだに気持ちの整理がついていません。
福島県では優先度が高い方から順番に検査が回ってくることになっています。
健康診断や甲状腺のエコーやホールボディーカウンターなどの検査はいまだ受けてい
ません。

検査の日程すら決まっていません。

平成26年度までには終わると言われました。

子どもたちがどのくらい被曝しているのか不安です。

事故直後、私は放射能汚染について何も知らず、枝野長官が直ちに健康に影響はない
等と言っているのを信用していました。

当時は原発事故より、地震や津波の方が大変でした。

放射能の情報はありませんでした。

子どもが、外で、泥んこになって遊んでいても、特に気にしませんでした。

1号機が爆発した後のことです。

下の子はなんでも口に入れようとする頃でした。

子どもたちを外で遊ばせていて、気が付くと、下の子が、石や砂利を口に入れようと
していました。

その頃は、放射能汚染について何も知りませんでした。

「やめなさい」と注意しただけでした。

3号機が爆発した後、「危ない、もっと遠くへ避難した方がいい」という話を聞きました。

明日から安定ヨウ素剤が配布されるということを知り、ここには被曝してしまう
と思いました。

夫と話しをして、とにかく南へ避難しようといって、避難先のあてもないまま、自動
車で関東方面に向かいました。

何日か、自動車の中で寝泊まりしました。

千葉県柏市の公園で、子どもたちを遊ばせてしまいました。
今年3月のテレビ番組で、放射性ヨウ素が高濃度に降った地域が報道されていました。
あの時、情報がなかったばかりに、子どもたちを被曝させてしまった。
あの時、あの時、どうしてあんなことをしてしまったんだろう、後悔ばかりが残っています。

正確な情報がほしかったです。あの時、もっとちゃんと正確な情報を出してくれていればと思います。

政府や東京電力を信用してしまい、自分で情報を得ようとしなかった。それがいけなかったのだと自分を責めて、夜中に目が覚めたりします。

7 国、電力会社は、私たちの苦しみを他人事としか受け止めていません。

ある人は、国民の生活のために原発を再稼働すると言いました。

福島の人たちは人間らしい生活をしていません。

それを聞いて、「私たち福島県民は国民ではないのか?」と思いました。

美しかった福島を返して下さい、もとに戻して下さい。

それができないのなら、原発なんてやめなさい。

「安全です、重大事故を起こすことはありません」と言いながら、こんなひどい事故を起こしたのです。

人間は、いい加減学ばなければならない時がきたのだと思います。

広島・長崎の原爆投下で核の恐ろしさを知り、スリーマイル島の原発事故、チェルノブイリの原発事故、そして福島第一原発の原発事故、沢山の経験と教訓を得たはずですが。

核・原子力は、人間が扱ってはいけないもの、暴走したときに人間の力ではコントロール出来ないものだということ。

何でも人間の思い通りになると勘違いしています。

自然の力も核の力も、人間にはコントロールはできません。

日本人は自分の身に現実から起こってからでないと、本当に大切な事に気付くことができないのでしょうか?

福島の教訓を自分の事として受け止めて未来を変えていかなければ日本の未来はないと思います。

子どもたちの未来のために美しい未来を残して下さい。

裁判所は、私たちの苦しみを、自分の事として、よく考えて下さい。

以上